

アメリカで学んだこと

茨城大学 加藤敏弘
(1997.11.11執筆)

UCLAバスケットボールチームの活動を通して、アメリカにおいてバスケットボールがどのようにとらえられているのかをみてきました。いくつかの特徴的な場面に目を向け、日本とアメリカのそれぞれの対応の仕方などを比較したのです。その結果、バスケットボールの枠を越え、日本とアメリカの文化的な背景の違いが根底にあることが理解されました。その最も顕著と思われるものは、「強さ」と「巧みさ」です。アメリカでは一般に「強さ」に対する価値観が大きなウェイトを占めていました。つまり、あらゆる場面で「強さ」が価値判断の重要なファクターとして作用していました。それに対して日本の場合は、「巧みさ」や「賢さ」が価値判断の重要なファクターとして作用しています。この違いがバスケットボールをめぐるシステムから実際の試合や練習場面まで、全ての場面での判断に大きな影響を与えているようです。

その違いを育む場として「ピックアップ・ゲーム」に注目しました。この「ピックアップ・ゲーム」とは、大人から子どもまで男女を問わず公園や学校などで愛好者が集まって行うゲームのことです。特に固定したチームはありません。勝者に挑戦するための仲間を集うために「ピックアップ(=拾い集める)・ゲーム」と呼ばれています。当然、強い者がピックアップされるケースが多く、そうでない者も順番を待ちさえすれば、次のゲームでピックアップするリーダーとなることができます。UCLAではUCLAバスケットボールチームの選手に限らず、NBA選手、一般学生、教職員、一般人、中学生・高校生が参加していました。

日本では10年ほど前から「ストリート・バスケットボール」として紹介され現在普及しつつあります。しかし、日本でのそれとアメリカでのそれは根本的に異なっています。日本のバスケットボールは学校やクラブなど固定したチームの活動が中心で、ストリート・バスケットボールはそこに参加していない人の集まりとなっています。したがって、レクリエーション色が強く、自由なファッションやコミュニケーションを楽しんでいます。アメリカではNBAの選手から小さな子どもまでバスケットボールを愛好する全ての人が個人として参加する場として機能しており、固定したチームでの活動よりも、それぞれの欲求や目的を達成することのできる場として広く普及しています。前述した通り強い者がピックアップされることから、自然に「強さ」を育む場として機能しています。また、常に勝者が継続して同一コートでプレイをする権利を有することから、勝つことを第一義に置きゲームが展開されます。

日本では、バスケットボールというまづ練習をしなければいけないと思いついています。そして固定したチームでの練習活動が中心になり指導者を必要とします。もともとコーチのベンチワークが勝敗に強く影響する競技ですから、指導者はついつい教えすぎてしまいます。また、選手は学ぶことよりも教えられることが当たり前になってしまいます。つまり、選手は指導者が要求する練習の内容を「巧み」に行おうとし、「巧みさ」や指導者の意図を理解する「賢さ」が求められてしまうのです。そして試合になると選手が試合をするのではなく、まるで指導者が試合をしているような状態になり、選手は相手チームの選手と戦うことを忘れてしまいます。アメリカでは、小さい時からピックアップ・ゲームに親しんでおり、そこで一人ひとりが相手と戦うことを学びます。そして、少しでも「強く」なって自分がピックアップされることを目指して個人で練習します。そういう場を経て、能力が高く、しかも集団活動に耐えられる選手が高校や大学やNBAのチームにまさしくピックアップされて活動しているのです。